



TITLE:

<書評>やまだようこ編著 『人生を
物語る - 生成のライフストーリー
』

AUTHOR(S):

森岡, 正芳

CITATION:

森岡, 正芳. <書評>やまだようこ編著 『人生を物語る - 生成のライフストーリー』 . 教育方法の探究 2001, 4: 48-49

ISSUE DATE:

2001-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/190246>

RIGHT:

【書評】

やまだようこ編著

『人生を物語る－生成のライフストーリー』

森 岡 正 芳

ナラティブ（物語）によって生（なま）の人生経験をそこなうことなく扱え、人生を描写することがそのまま資料として活かせる。これはまことに魅力的な方法論で、私もこのところナラティブに関わる情報に接触することが喜びである。しかし、研究においても実践においてもさて実際にどのように形にするのかといわれると、そう具体的なものが邦文ででていないのが現状であり、まさに待望の書といってよい。このアプローチには読者の働きが欠かせない。読者一人一人に解き口があり、その積極的な応答性を含みこんでの方法論である。それによって実証性が補完される。私もその積極的な読者として印象を述べたいところだが、各章の後にまた多彩でかつふさわしき論客がコメントを付けているこの本のしくみは、さながら連句か絵巻物をみているようである。コメントのコメントというのもいささか興醒めであろう。

人生そして、生がこの本の大きなモチーフである。実はナラティブは心理学の歴史のなかでは由緒ある方法論で、オルポート（Allport, G.）が形態生成的（morphogenetic）と名づけた研究の潮流をみごとに受け継いでいる。伝記や手記、自伝をどのように資料として用いるかというテーマにつながる。しかし従来の方法と質の違いを感じるのは、伝記、すなわち生の物語（biography）の生（bio）の部分にも力点がおかれているからであろう。この点が深く共有されているところに、統一的な色合を感じる。各章が血肉に富み、語り口も個性的。

まず江口（Ⅱ章）、やまだ（Ⅲ章）、能智（Ⅵ章）が語るように、個人の生が語りのなかに鮮明に見えてくるのは病いや障害、生死に直面したときのことであろう。物語ることを必要とする人生の時は同時に危機であり、転機であることが多い。転機の意味の確認には物語を必要とするのである。その場合物語は自己語りという形式をとる。聞き手そして読者も、語り手その人の生が感じられるところに響応（resonance）する。物語論はアイデンティティ研究に説得力のある方向性を示してくれる。能智（Ⅵ章）、稲垣（Ⅶ章）の試みが示すように、アイデンティティは聞き手と共同構成されるものであり、しかも物語の枠によってそこに時間的変化を盛り込むことができる。またアイデンティティは個人の生きた証であると同時に、個を超えた生成継承性、文化的な次元と切り離せない。

一方、物語は変化を生み出す。人はある喪失をきっかけにして物語をはじめると同時に、喪失は生成へと転換する。それはいかにして可能なのだろう。石井（Ⅳ章）が述べるように、物語

を支える関係性（並ぶ関係）がまず必要だ。そこで出来事が自分の言葉として語られ、語り直される。また菅原（Ⅴ章）の聴取、再現描写にきわだっているが、聞き手は語りが含むドラマ、パフォーマンスをのがさず受け取っている。語りのモードは多様で、聞き手の再現描写の苦心それ自体がまた新たな意味生成性をはらんでくる。文章のなかに息づかいや足取りまでも感知できる。聞き手がこのように苦心しているのだから、読者も工夫が必要だ。きわめて個別的なエピソードの記述はメタファとして、多重な意味を喚起してくる。矢野のⅧ章を読み、おおいに考えた。この書物は、冒険的な読者そして聞き手になる実践の書である。物語はできあがってしまったらまたいったん壊すことも必要。生成の流れをけって絶やさない。

丸山真男が日本固有の歴史意識の古層を表現するのに「なる・つぎ・いきおい」という三つの言葉をあげていたと記憶するが、本編にも通奏低音のようにこれらの言葉が響いている。ナラティブアプローチを歴史意識の古層にも接触できるような実践の方法として洗練していきたい。「つぎ」を楽しみにしている。

（奈良女子大学文学部）